

東日本大震災後、仏教やキリスト教などの宗教者、医療者、市民グループが「心の相談室」を設立し、犠牲者の弔いや遺族の悲嘆ケアに取り組んでいる。室長の岡部健さん(62)＝仙台市青葉区＝は長年、がん患者の在宅ホスピスケアを続ける医師。自身もがんを患いながら、遺族や死を前にした患者の苦悩を緩和する宗教的ケアを社会に定着させようと、力を注ぐ。

震災後に窓口

心の相談室は震災後の昨年3～4月、犠牲者の火葬が行われていた葛岡斎場(青葉区)

再生 せんだい

ひと模様

27

心の相談室長

岡部 健さん(62)

5月には悲嘆ケア、医療、生活支援の専門家も一体となつて、無料の電話相談を開始。栗原市の住職の呼び掛けで、避難所や仮設住宅に出向く傾聴移動喫茶「カフェ・デ・モンク」も始め、秋からはラジオ番組を通じて、支援の届かぬ民間借り上げ住宅の被災者に向けたメッセージを発信している。

岡部さんは宗教を超えた活動のまとめ役として室長に就いた。移動喫茶で支援の数珠や位牌(いはい)を配ると人だかりができ、僧侶が経を上げると、被災者が涙を流して手を合わせる姿を目の当たりにした。「宗教的ケアのニーズが高く、医者は代わりになれないと痛感した」と言う。

「お迎え」体験

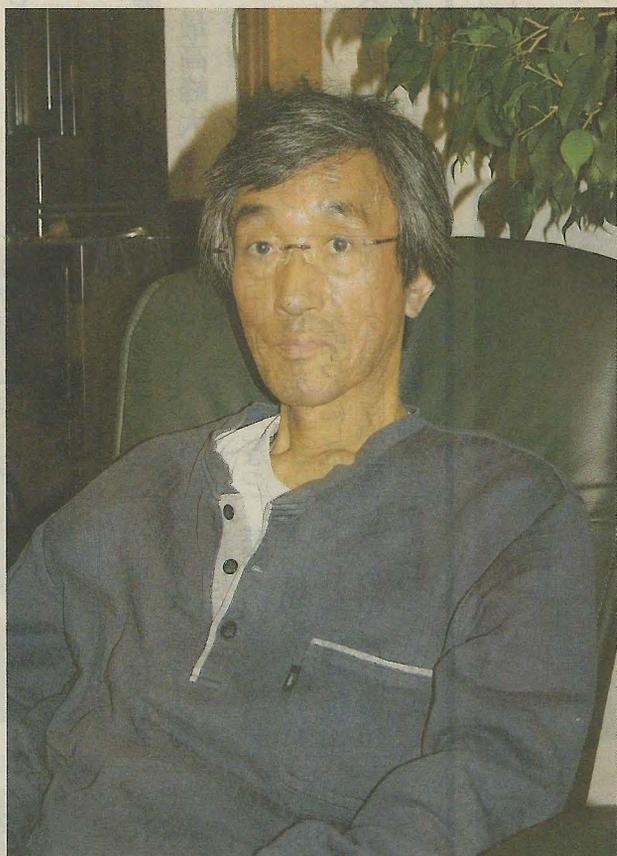
うになつて、苦しんでいる。1997年から在宅ホスピスケアを始めた岡部さんは、4割超の患者がお迎えを体験していた。

死後の世界に関する霊的(スピリチュアル)な心の痛みも、死期に迫った患者が他界した話を耳にした。霊の存在を否定していた人や、仮設住宅を祈ることで和らげられたという。親の姿などを見る「お迎え」について語るのを、何度も経心理までえぐり出す話。そこにとっということが隠されている。

「幽霊問題は、人間の深層に、今春、事務局を置く東北大で、実践宗教学寄付講座が3年間の予定で始まった。災害や事故の犠牲者の遺族ケアや終末期医療の現場で、宗教的ニーズに応えられる専門職「臨床宗教師(仮称)」の養成を目指している。

宗教的ケアの定着目指す

遺族・患者の心の支えに



「死に関係するところに臨床宗教師が居る形をつくりたい」と話す岡部さん＝青葉区の自宅

るか、宗教学者や民俗学者が研究し、現場から挙がる苦痛を宗教者がどう解決するかが重要と指摘する。

米国の被災地ケアのガイドラインでは、地域の宗教団体による宗教的ケアが最初に入り、その後医療、心理の専門家が精神科の絡む問題を引き受けると言う。

「日本人にも根深い宗教性があり、宗教的ケアでスピリチュアルな痛みから救われるのに、医療と宗教の間に大きな壁があり、必要なケアが行われてこなかった」と説明す

これまでひとつたがんと患者は2000人を超す。体の苦痛を取り除くだけでなく、患者と家族の心をどう支えるか自問し続け、宗教的ケアの必要性を痛感してきた。「その種はまけたんじゃないかな」と思っている。